

## 1. 研究背景と目的

舞踏は日本に起源を持つ芸術形式で、その独特な表現方法と哲学理念は多くの国々の芸術家に影響を与えている。特に土方巽、大野一雄、山海塾といった舞踏家や舞踏グループの影響力は顕著だ。

近年、中国で舞踏は新たな芸術の潮流を起しており、それは舞踏家や舞踏グループの枠を超えて、多くの関係者を魅了している。

本研究では、日本の舞踏家や舞踏グループの影響を受けた中国人アーティストたちの活動や、それを広める舞踊劇（演劇）に焦点を当て、中国における舞踏の実践とその美学を考察する。

## 2. 研究方法

今回の発表では、研究の方法を、主に文献資料の読解とする。対象にする文献は、中国の舞踏家や舞踏団などが主催する公演やワークショップの広報物（開催案内）、批評文、ならびに舞踏家たちへのインタビュー記事である。それらの読解に基づき、舞踏家たちの表現方法や美学思想を明らかにする。

## 3. 結果と考察

### (1) 中国の舞踏家の活動と思想

近年、中国では舞踏に関心を持つ人々が増え、独自の舞踏グループが次々と立てられている。こうした動きの中で、とりわけ杜昱枋（ドウ・ユウファン）や胡高陽（コ・コウヨウ）、許曉雷（キョ・ギョウライ）、鄒思揚（スウ・シヨウ）といった舞踏家たちの活躍が目立つ。杜は、舞踏を通じて自己の身体を探求することに重きを置き、2012年に「元初舞踏」を、2014年に「舞踏白狐系」という舞踏グループを設立した。杜のグループは参加者が身体を通じて自己を見つめ直す機会を提供しており、彼女は舞踏を通じた自己認識の重要性を強調する。胡は、日本での舞踏経験から「青蓮舞踏」を設立し、身体性に基づく表現を重視した活動を展開している。彼の活動は、身体の実験や記憶を重視することで、日常から芸術的な美を発見することを目指している。許は、「皮相之我」という舞踏団を立ち上げ、中国の美学に根ざした舞踏の創作を目指している。許は、舞踏を通じて人生を育み、内面的な成長を遂げようとする。創作においては、自らの文化や身体の話をも活かそうとしている。鄒は、2011年から工藤丈輝に師事し、身体や物体を起点に幻想的な景観を構築するアプローチで舞踏を展開している。彼は身体に蓄積

された資料を開発することで、より広い舞踏表現を追求している。

### (2) 舞踏の影響を受けた舞踊劇

舞踏の影響を受けた中国の舞踊劇は、独創的な表現を提示することで知られる。例えば、林麗珍（リン・リーチェン）の無垢舞踊劇は「緩」と「引き算」の理念を中心にしている。この思想は、山海塾が「静の美」を追求していることと共鳴している。また、もう一人の重要な代表者である趙梁（チョ・リョウ）の舞踊劇は、伝統的な中国芸術である昆劇や武術を組み合わせ、深い文化的背景を持つ作品を生み出している。彼は、伝統文化における内面的なことを伝え、古典的要素を現代舞踊の表現手法と融合させている。趙は、土方の東北回帰的な趣向にも影響を受け、「私たちにも独自の文化や身体の話があるのだから、その一部を取り入れて、私たち独自のダンスを創作できないか」と考えている。また、中国人ダンサーの黄豆豆（コウ・トウトウ）によると、趙の作品は山海塾の作品に似ている。これらの舞踊劇は、日本の舞踏が持つ静と動の美学が、中国の伝統的な文化にどのように溶け込み、新たな表現を生み出しているかを考えさせる。

### (3) 舞踏と中国の美学の共鳴について

中国の舞踏家たちに影響を与えた、日本の舞踏の理念や思想には、中国美学との共通性があると考えられる。特に「静」と「動」、「内面的な美しさ」といった点がそうである。例えば、老荘思想の「虚静説」は、静寂の中にある無窮の変化と可能性を示すものであるが、それは舞踏における身体の微細な動きと静けさの内に見出されもしよう。山海塾の作品はこの思想を具現化し、静寂の瞬間に潜む豊かなエネルギーと表現力を通じて、観客に深い内省を促す。2010年から山海塾のメンバーである石井則仁は、「山海塾には究極の静の美があった」と述べている。この「究極の静の美」とは、静止や静寂の中に存在する深い美しさを意味している。石井が話すこの美は、単に動きを止めることではなく、静寂の内にある豊かな表現である。そして山海塾は、動きの中の「静」において、その内に秘められた心情を感じさせるだろう。それは中国の絵画や詩の「意境」と通じる。中国において「美」は、外形とともに、その内に宿る質感と深みをもって感じられるもので、舞踏も同様に、身体を通じて情動が表されるという面がある。

### 【主要参考文献】

・付尚书(2022)『老荘の「虚静説」の美学影響に関する分析』(『老庄虚静说的美学影响分析』) 作家天地